

(全文自動翻訳)

与那国島は日本の最西端に位置する離島であり、生まれも育ちもこの地である姫代ウケマスは、遠い昔、生活が輝く星や潮の満ち引き、桑の実の熟れ具合で刻まれていた日々を覚えている。

今日、星々はレーダー塔に遮られ、観光地のボランティアである70歳の植増さんは別の懸念を抱いている。台湾の東約70マイルに位置する日本の軍事拠点・与那国島は、中国の海軍拡張を封じ込める戦略的島弧「第一列島線」に沿って存在する。中国が日本の最近の台湾支持表明に激怒する中、植益さんと島に住む約1600人の住民は、急速にエスカレートする紛争の最前線に立たされている。

「人々が犠牲になるのは望まない」と彼女は言った。「桑の実が赤く色づき、ユリが咲くのを見たい。ただ普通の生活を送りたいだけなの」

何十年もの間、沖縄県に属する与那国島は、野生の馬やシュモクザメが生息し、沖合には失われた文明の遺跡だとする説もある岩礁群が広がる、東シナ海における魅惑のオアシスであった。この島が日本で最も知られたのは、おそらく2000年代の医療ドラマ『ドクター・コートの診療所』の舞台としてだろう。東京の外科医が沖縄の辺境の診療所に左遷される物語である。

しかし過去10年間、日本政府は数千万ドルを投じて与那国島を中国の軍事的侵略に対抗する要塞と化してきた。部隊、レーダー塔、弾薬貯蔵施設が配備されている。紛争が発生した場合、同島の日米軍事資産は中国軍艦がさらに東の公海へ進出するのを阻止できる可能性がある。島には3つの小さな集落、小さな空港、そして約230名の駐屯部隊が存在する。

中国は11月初旬以降、日本に対する全面的な報復措置を主導している。これは日本の高市早苗首相が、中国が台湾を攻撃した場合に自国が軍事介入する可能性があることを発言したことを受けたものだ。台湾は自治民主主義国家であり、北京はこれを自国領土の一部と主張している。中国政府は報復措置の波を巻き起こし、日本への観光を控えるよう呼びかけるとともに、沖縄周辺を含む海上・航空パトロールを強化した。中国は火曜日、台湾周辺で実弾射撃を伴う軍事演習を実施する計画だ。これは海軍と空軍による力を見せつけるもので、与那国島付近での活動も含まれる。

与那国島は、日本の安全保障が台湾と密接に結びついていることを示す事例である。中国による台湾侵攻は、日本の重要海上交通路へのアクセスを脅かし、遠隔地の沖縄諸島を脆弱な状態に陥らせる可能性がある。(中国側の論評家らは近年、沖縄に対する日本の主権に疑問を呈する動きを見せている。)

日本の防衛相、小泉進次郎氏は最近、同島を訪問し、「わが国への武力攻撃」を抑止するため、中距離対空ミサイルを配備する計画を詳細に説明した。この動きは、自衛隊が沖縄諸島の島々を強化し、中国に対する牽制とする広範な取り組みの一環である。中国強硬派の麻生太郎首相は、来春までに日本の軍事支出を国内総生産(GDP)比2%に引き上げる計画を、予定より2年早めて加速させると表明している。

中国は与那国島へのミサイル配備計画を「極めて危険」と非難し、日本が「軍事的対立を挑発している」と主張した。中国軍は最近、同島付近で無人機を飛行させ、不満を表明した。

住民たちは、サトウキビ畑や駐屯地での長い労働の後、地元の居酒屋で話題に上ることもあるが、緊張を無視しようと努めてきたと語った。インタビューでは、台湾への中国攻撃があっても島から避難しないと強硬な態度を示す人もいた。

多くの住民は危機が差し迫っているという見解を否定し、メディアが紛争への懸念をあおっていると非難した。しかし2016年に駐屯地が設置されて以来、島のアイデンティティが変わったことは認めている。当時、軍受け入れ賛成票は632票、反対票は445票だった。現在では兵士向けアパートが建設され、軍関係者の家族がレストランや神社で与那国島の地元住民と交流している。

島の市長である上地恒雄氏は、防衛力拡大に慎重な姿勢を示すことを公約に掲げ、今年当選した。同氏は、米軍が島に駐留し日本との合同訓練を行うことについて懸念を表明している。米国は近年、訓練の一環として与那国島にレーダーシステムを配備し、医療訪問を実施している。

上地氏はインタビューで、住民の大半はただ日常生活を送ろうとしていると述べた。島を要塞化することには警戒しているものの、ある程度の備えは避けられないと認めた。

「何かが起きてからでは手遅れだ」と彼は言った。「だから最悪の事態に備えている」

近年、与那国島は台湾に近接していることから、地域の緊張の焦点としてますます注目されている。2022年、当時の米国下院議長ナンシー・ペロシが台湾を訪問した後、中国はこれに対し少なくとも11発のミサイルを発射した。そのうちの1発は与那国島の北東約50マイル(約80キロ)の地点に着弾した。

中国による台湾への脅威がますます大胆になる中、新たな警戒感が高まっている。日本政府は今後数年間で沖縄の離島全域に地下シェルターを建設する計画を進めており、与那国島には200人以上収容可能な施設が整備される。当局は避難訓練を実施し、台湾からの難民流入に備えて住民の受け入れ準備を進めている。

日本も今後1年間で与那国島に約30名の部隊を派遣し、電子戦部隊を編成する計画だ。

多くの住民は、日本政府の意図に懐疑的だ。兵力の増強は島をさらに標的にすると指摘する。沖縄には平和主義の気風が根付いている。その背景には、米国の植民地支配の遺産、第二次世界大戦、そして日本国内に米軍基地が多数存在する状況がある。

アマチュアダイバーの富取隆志さん(56)は数年前に東京近郊の千葉県から、その美しい海に惹かれて与那国島に移住した。ミサイル配備の決定は島をより危険にすると感じていると語った。

「戦争は島に深刻な被害をもたらす」と自動車整備士でもある富取氏は語った。「ミサイルなど持たない方がいいのではないか？ 報復しない方がいいのではないか？」

それでもなお、より強硬な意見は、島は自らを守る必要があると主張している。

与那国漁業組合の竹西重徳理事長は、日本の周辺海域における中国の動きに懸念を強めていると述べた。

「中国が何をしようとしているのか、我々には決してわからない」と彼は言った。

安全保障を超えて、竹西氏は、地元の人口が高齢化・減少する中、部隊が与那国島の活気を維持するのに役立っていると述べた。島には主要な港湾施設、高等学校、病院がない。近年、多くの若者がより良い機会を求めて日本の都市部へ移住している。

「軍隊がなければ与那国は存続できない」と竹西氏は語った。

そして、地政学的なライバル国に挟まれるストレスもある。与那国島をもっと東へ、おそらくハワイに近い場所へ移動できれば、生活はもっと良くなるかもしれないと冗談を言う人もいる。

ある晩、若い父親たちがガレージに集まり、クリスマス当日のライトパレード用の山車を作っていた。これは与那国島の伝統行事だ。クリスマスソングが鳴り響く中、彼らは何時間もかけて部品を打ち付け、電飾を張り巡らせた。目的は、住民、特に子供たちに、気分転換となる軽やかで楽しいものを提供することだった。

「彼らの笑顔を見られることが何よりの喜びです」と、4人の子の父である37歳のスギモト・タカノブは合板を測りながら語った。「それがこのパレードの意義なのです」

地域で再び緊張が高まる中、杉本氏は与那国島の人々が状況を変える手立てはほとんどないと受け入れるようになったと述べた。

「そうあるしかないんだ」と彼は言った。「俺たちはそういう存在になってしまった」

<https://www.nytimes.com/2025/12/30/world/asia/japan-china-island-yonaguni.html>